

基調講演

平城宮跡の調査研究・ 公開活用と奈良文化財研究所

東京大学名誉教授 佐藤 信

ただいまご紹介いただきました東京大学名誉教授の佐藤^{さとう まこと}信でございます。

本日は、平城宮跡の史跡指定 100 周年、それから奈良文化財研究所の創立 70 周年、大変おめでとうございます。

今日は、私の先輩もおみえでして、ここで話をさせていただくこと大変恐縮するとともに、光栄に存じております。

1. 私の奈文研時代

最初に、私と奈文研^{なぶんけん}——以下、奈良文化財研究所を奈文研と呼ばさせていただきます——の関係をお話しします。私は、昭和 46 年（1971）に入学した東京大学を卒業して、大学院のドクターコースの途中で奈文研に入所試験を受けて入らせていただきました。昭和 54 年（1979）に入所して、6 年余り、昭和 60 年（1985）に文化庁の記念物課^{きねんぶつか}に転任になるまで奈文研で勉強させていただきました。

私がちょうど大学で古代史を勉強している頃に平城宮跡の出土木簡^{もつかん}がたくさん公開されてきました。それを利用して、古代の米を都^{こうしん}に貢進する税制について、平城宮で出土した米の荷札木簡^{にふだもつかん}も使いながら研究して卒論を書いた思い出があります。

私の頃は、国立文化財研究所ということで、文化庁の機関（研究所）として位置づけられていました。そのため、人事院^{じんじんいん}の国家公務員上級職

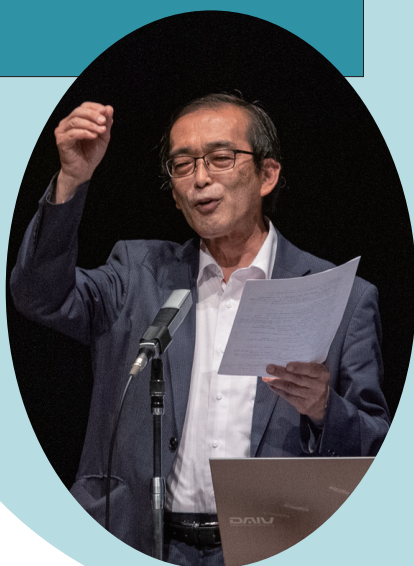


図1 現在の平城宮跡資料館内にあった平城宮跡発掘調査部（1980年）

試験相当試験を受けて何とか合格して入所しました。その頃、試験で合格した人は上級職の資格を持っているということになります。

私は、現在の平城宮跡資料館に奈文研の平城宮跡発掘調査部があった時代に仕事を始めました（図1）。そして、在職期間の最後の頃に、平成30年(2018)^{しゆんこう}竣工の現・新庁舎の前にあった、旧奈良県立医科大学の病院を改修した旧庁舎に奈文研が移転し（図2）、私もそこで仕事をすることができました。

ということで、私の奈文研時代の大半は、プレハブで仕事をしました。また、最初の頃には昼に給食制度があって、同じ釜の飯を食べるという形でした（図3）。昼休みは、今もやっていると思いますが、必ずサッカーをしないといけないというか、サッカーをすることになっていました。私の場合、テニス部に属してテニスを毎日、雨が降ってもやっていました。発掘現場の現場班の時は、現場から上がってきて、勤務時間が終了すると、アルコールも入れながら、発掘調査の状況をめぐって、会議、議論をするということもよくありました。今では、自動車通勤の職員も多いし、働き方も変わっているので、なくなっていると思いますが、私の頃は、夕方に勤務時間が明けた後は、所内のあちこちでアルコールが消費されていくようになっていました。

旧庁舎の2階の一番奥に私が所属する木簡を担当する史料調査室がありました（図4）。そこから「今日はちょっと用事があるので早く帰ります」といって部屋を出ると、私、まだ若い頃でしたから、廊下の順番に隣の考古第三調査室で先輩が「おい、佐藤」と声をかけてきます。そこでちょっと1杯ビールを飲んで、「今日はちょっと失礼します」といくと、その次の考古第二の部屋で「おい、佐藤」、そして、その次の考古第一の部屋でも「おい、佐藤」、それからその先で現場班が会議をしている部屋で「おい、佐藤」と呼ばれて、なかなかすんなりと帰れないという



図2 奈文研旧二条町庁舎（旧奈良県立医科大学病院）(1980年)



図3 現在の平城宮跡資料館内にあった食堂の風景 (1980年)



図4 旧庁舎内史料調査室（研究室）(2013年)

ような状況がありました。今は大分変わってしまったと思いますが、そうした家族的な付き合いみたいな雰囲気がまだ残っていました。

私、入所したときの研修の発掘現場では、私より先に入所されていた先ほどの本中眞所長と一緒にしました。また、その後、同じ現場班に属しましたので、SD 2700 という木簡がたくさん出土する溝を何回か一緒に発掘調査して、何千点でしょうか、木簡を取り上げることができたという経験もあります。その時は、松村恵司前所長とも一緒にの現場班でした。その後、文化庁に移り、史跡の保存を担当した後、大学に籍を移して教育研究を行ってまいりました。

今年、奈文研は創立 70 周年ですので、昭和 27 年（1952）に創設されている。私も、ちょうどその年に生まれております。

そして、奈文研に勤めていた私が 28 才のときに、所内結婚をさせていただきました。私で所内結婚 25 組目か 26 組目でしたので、奈文研創立後の 28 年間で 25、26 組の所内結婚があったことになります。今はどうなっているか分かりませんが、そういう雰囲気のとときの奈文研を経験したのです。

2. 平城宮跡の 100 年

さて、最初に平城宮跡の指定 100 周年に関わる話をいたします。今日、平城宮跡は特別史跡平城宮跡であるとともに、世界文化遺産の構成要素でもあります。大正 11 年（1922）に史跡指定されて、昭和 27 年（1952）、奈文研創立の年に特別史跡^{とういんていせん}になっています。そして、その後、東院庭園などはダブル指定として平成 21 年（2009）に名勝、翌年、特別名勝に指定されました。

また、平城宮の南に接しております平城京朱雀大路跡^{すざくおおじ}も昭和 59 年（1984）に史跡指定されて、国営歴史公園などでは一体として扱っていただいています。

平成 10 年（1998）に、「古都奈良の文化財」というネーミングでユネスコの世界文化遺産になったことは皆さんもご承知だと思います。これは東大寺、興福寺、春日大社、春日山原始林、元興寺、薬師寺、唐招提寺、そして平城宮跡などから構成されますけれども、この古都奈良の



図5 平城宮第 139 次調査 SD2700 の発掘（1982 年）

文化財の歴史的な価値を証明する上で、世界あるいは人類にとっての顕著な普遍的価値を証明することが世界文化遺産のためには必要でした。その際、世界人類にとっての学術的・歴史文化的な価値を証明する上で、私は奈文研が果たした役割というのは、平城宮跡だけに限らず大きかったのではないかと考えています。

平城宮跡の保存につきましては、この前まで平城宮跡資料館で「未来につなぐ平城宮跡—保存運動のあけぼの」展をしていましたので、ご覧になった方もいらっしゃると思います。明治の頃に市民の有志の^{ただ かじゅうろう}棚田嘉十郎さんや、地元の豪農のお宅である^{みぞべ ぶんしろう}溝辺文四郎さんたちによる保存運動が展開され、その保存運動の中で、自分たちで土地を買い上げて宮跡を保存しました。そして、後に国にその土地を譲って^{ないむしょう}内務省の史跡指定になるという経緯があります。このように、平城宮跡の保存は、上から起こったことではなく、市民レベルでまず実現したということに、私は非常に大きな意味があると思います。

今日も、J R奈良駅前の棚田嘉十郎さんが自前で設立した平城宮跡はこっちのほうですよという^{せきちゅう}石柱を見てからこちらにうかがいました。

棚田さんや溝辺さんたちが^{だいごくでん}大極殿—今日でいう第二次大極殿です—を中心とした大極殿、^{ちやうどういん}朝堂院あたりの土地を買われて、国に寄贈して、それを内務省が史跡に指定したという経緯でした。しかし、この時、史跡に指定されたのは、平城宮跡全体としてはごく一部だったわけです。ですから、戦後になっていろいろな保存問題が起きてきました。特に、平城宮跡のかなりの部分に^{きんてつ}近鉄が車庫を計画したとき、それから、国道 24 号線バイパスを平城宮の東側に接してつくる



図6 東院地区で曲がる国道 24 号線バイパス (北から) (2019 年)

ということで、もう工事が始まっていた段階で、平城宮跡が東側に、南北 750 メートル、東西 250 メートルの範囲、今でいう東院のところが出張っているということが明らかになったときには、大変な保存問題になりました。

この2つの大きな保存問題の際には、国民的な保存運動が起きまして、そのバックアップの下で、近鉄車庫問題は無事に解決して、車庫はできませんでしたし、国道 24 号線は建設大臣の勇断もあって、現在のように、24 号線バイパスをちょうどクランクのように曲げて、東院を避けてもらえました（図6）。つまり、平城宮跡は、これらのときも含めて、国民的な保存運動によって守られてきたということが出来ます。

私が属しておりました東京大学の、当時国史学研究室、今の日本史学研究室の主任教授の部屋には、タイプ印刷で作ったこの頃の保存運動のパンフレットがずいぶん残って置いてあります。おそらく日本全国の日本史の研究室、考古学の研究室では、この保存運動で先生や学生たちが活動したのでしょう。

このように、国民的な保存運動のおかげで、今の 131 ヘクタールの特別史跡の指定地が守られてきたという経緯があります。奈文研にとっては、その調査研究の材料が市民や国民のおかげで提供されているということになります。私のいた頃は、国立文化財研究所でもありましたので、国民の税金で仕事をしているという意識がかなり強くありました。だから、国民に奉仕するために、国民のためにこの仕事をしているのだ、文化財研究をしているのだという意識は、先輩たちにもいっぱいあったと思っています。

平城宮跡につきましては、奈良文化財研究所の調査や研究によって、学術的な価値が明らかになったということが、先ほど申し上げたように世界文化遺産の登録の際にも有効に機能しました。

また、平城京跡についても奈文研、奈良市教育委員会、大和郡山市教育委員会、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所の協力の下でさまざまな遺跡、史跡が調査研究されてきました。そして、それらの成果が最終的には集まることにより、古代都市の姿が、平城宮跡と同様によく分かってきています。精密な発掘調査の成果が積み上がって、古代都市の実像がこれだけ明らかになった都市は、世界的にも珍しいといえます。

また、その後、文化庁が公有化した土地において、往時、遺跡がどういう姿であったかということを、多くの市民、県民、国民に見ていただくために史跡整備が始まります。一番初めの頃は、史跡整備の手法は、盛り土して張り芝するという、芝生を張って建物があつたところをちょっと高くするぐらいの形の整備でした。それから基壇をかなり復元するとか、それから柱位置がわかるように標示するというようなかたちになり、発掘したときの発掘現場の地表面、当時の遺構面が分かるよ



図7 「覆屋」 遺構展示館 (1999 年)

うに^{おいや}覆屋を造って見ていただくという
ようなことも行われました（図7）。

その後、柱位置^{はしらいち}をツゲの木で表現してあっても、なかなか当時の建物のイメージができないのではないかとということもあって、地下の遺構は保存しながら、建物を実際に遺構の位置の上に復元して建てるというようなことも行われるようになっていき、平城宮の第二次大極殿^{だいにじだいごくでん}近くにある宮内省の南殿^{くないしやう なんでん}（図8）や東院の庭園地区^{とういん}（図9）が整備されました。東院庭園地区では建物だけではなくて、奈良時代当時、建物から鑑賞^{かんしょう}された苑池^{えんち}も、その当時のままに一部を復元したり、石を補った^{すはま}りしながら、当時の石を使って州浜^{すはま}のあるみぎわを再現した形で整備されています（図9）。

そして、大きな宮殿建築についても、ご承知のように朱雀門^{すざくもん}、第一次大極殿^{だいいちだいごくでん}、そして、第一次大極殿^{なんもん}院南門が最近復元され、今、その東楼^{ひがしろう}の工事が始まっています（図10）。

こういった史跡整備については、全国の国指定史跡でも同じようなことが課題となりました。土地を公有化したならば、草ぼうぼうのままにすることなく、そこが何か見て分かるようにするべきだということになってきたのです。そして、平城宮跡での整備は、全国の史跡整備を実験的にリードするものだったということが出来ます。

また、建物の復元については、様々な客観的・学術的なノウハウを検討した上で、当時の工法^{こうほう}を用いて建てるという、厳密な復元建物の設計自身が研究でもあるわけですが、当時の工法で建てるということも、様々な意味での技術の研究や伝承につながるものです。こうした建物の復元に関する学術面を奈文研はリードしてきたのです。

こうした奈文研の様々な取り組みがあってこそ、平城宮跡は、世界遺産^{せかいいさん}にも登録されましたし、平成 22 年（2010）の遷都 1300 年祭の会場となったのだと思っております。さらに、現在は、



図8 宮内省南殿の整備 (1985 年)



図9 東院庭園の整備 (2001 年)



図10 大極殿・南門・東楼の整備 (2022 年)

こくどうつうしょう こくえいへいじょうきゆうせきれきしこうえん
国土交通省による国営平城宮跡歴史公園ということで、国営歴史公園として整備され、活用されることが目指されています。

朱雀門の復元が平成 10 年（1998）で、東院庭園の復元が平成 13 年（2001）、第一次大極殿の復元が平成 22 年（2010）、大極殿院の復元は現在進行中で、今年、大極殿院の南門がオープンしました。こうした建物復元は、とても時間がかかることのように思われるかもしれませんが、私は長い目で見れば、極めて頑張って復元を含めた歴史展示をこの国営公園で行っていると思っています。

私は、文化庁にいて、主に国の史跡を新しく指定したりする仕事をしておりましたが、そのとき私が個人的にモットーとしておりましたのは、この史跡というのは 100 年、200 年、1,000 年後まで残る、私たちの子孫に残す文化財、文化遺産であるということです。ですから、私は文化遺産というのは、現在生きている私たちだけのものじゃないと思っております。私たちよりはるかに多くの後世の、私たちの子孫のためのものでもあるので、それをしっかりと保存して残していかなければいけない。もちろん、今生きている人間が活用するのは当然良いことだと思いますけれども、今の私たちだけのものではないと思って仕事をしておりました。

世界遺産、平城宮跡歴史公園となってからは、現在、様々な活用も目指されています。展示施設として平城宮いざない館もできまして、奈文研の平城宮跡資料館とはまた別の場所でそれぞれ機能して、多様な平城宮跡の価値を、やさしく分かるように展示していただいています。

また、特に活用面では、いざない館のほうでも多様な体験学習の場を提供されていると承知しております。そのような形で市民、県民、国民の方に親しまれる特別史跡あるいは歴史公園になるといいなと思いますし、同時に、私は、世界遺産「古都奈良の文化財」全体のガイダンス的な機能も持ってもらえるとありがたいと思っています。

奈文研では、現在も平城宮跡を発掘していますし、これまで出土した木簡をはじめとした遺物の研究も進めてきています。こうして平城宮跡あるいは平城京の歴史的、文化的な価値というものをさらに明らかにする、解明する。私は、こうした歴史的な価値を明らかにする奈文研の営みは、平城宮や平城京の文化遺産としての価値を高めることにつながっていると思っています。

世界文化遺産について、私は、よくお話しするのですが、世界文化遺産に登録されたらおしまいと思っている方が時々いるのですが、そうではなくて、世界文化遺産というのは登録された後が本番で、その価値を高めてそれを発信して、世界からおいでになる人たちに分かりやすく提示しなくてはいけない、登録までも大変な努力が要るのですが、登録された後のほうが、さらに大変な努力が必要になるといつも申し上げております。平城宮跡について、そういったことを担うのは、やはり奈文研であり、あるいは平城宮跡歴史公園であると思っています。

3. 奈文研の 70 年

さて、奈良文化財研究所 70 年の話に移っていききたいと思います。

先ほど、私と奈文研の関係ということで少し話してしまいましたが、奈文研は、昭和 27 年（1952）に、文化庁の前身の文化財保護委員会のもとに創立されました。組織としては、歴史研究室、建造物研究室、美術工芸研究室の 3 研究室と事務部門がありました。奈文研の創立にあたっての最初のミッションは、古都奈良の東大寺、興福寺、薬師寺をはじめとした南都の

諸大寺が抱えている文化財、もちろんそれ以外にもたくさん奈良の地には文化遺産がありますが、それらを総合的に調査するということでした。そこで、3研究室が、奈良の仏像をはじめとした様々な美術工芸品、そして奈良には 1300 年前の古代から建っている建物、例えば、薬師寺東塔、正倉院宝庫、それに東大寺三月堂などがたくさんあるわけで、そうした建造物の研究、そして歴史の研究を行うと



図 11 奈文研の春日野庁舎 (1973 年)

ころから始まりました。途中から、平城宮跡や飛鳥・藤原宮跡の発掘調査という仕事が奈文研に入り、組織とともに発掘調査の機能がかなり大きく拡充されました。この結果、今では、奈文研といえば、発掘調査機関というイメージが強くなっていますね。

しかしながら、奈文研は、考古学の研究所としてつくられたものではありません。最初は、考古の研究員も歴史研究室に所属していたように、歴史も建造物も美術工芸ももちろん考古も含めて文化財を総合的に研究する機関として設立されたということを申し上げたいのです。そして、社会的な要請にともなって、組織としては、平城宮跡発掘調査部、飛鳥・藤原宮跡発掘調査部、飛鳥資料館、埋蔵文化財センターができました。奈文研がリードして編み出してきた様々な発掘調査の技術やノウハウを全国の都道府県、市町村の埋蔵文化財担当者に伝える研修も行われるようになりました。考古学のナショナルセンターになったと言っていると思いますけれども、そういう形の仕事が増えてきたのです。

先ほど申し上げた最初の 3 研究室があった春日野の研究所の本部というのが、今も奈良国立博物館のところに残っている、旧奈良県物産陳列所という大変美しい、重要文化財に指定された建物でした（図 11）。その春日野庁舎時代、私もその歴史研究室に行って、いろいろ仕事をしたり、あの建物には門衛さんが宿泊する建物があって、当時は宿直制度もあったので、宿直する建物に泊り込んでお水取りを夜中まで見に行くなどのことを、奈文研の若手職員と一緒にやったりした記憶がございます。

奈文研は国立の研究機関として創立されましたので、文化庁の 3 館 2 所一当時あった東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館と東京国立文化財研究所と奈良国立文化財研究所と、文化庁文化財保護部の記念物課、美術工芸課、建造物課、伝統文化課は、いずれも同じ文部技官あるいは文化財調査官が仕事をする組織ということで、技官会議といいまして、年に一回は学芸員や調査官、研究員の研究職全員が集まって、いろいろな議論や研究報告を行う会議もありました。

後に行政改革によって、国立 (National) という名前は英文表記のみに残された形になりました。平成 13 年 (2001) に東京と奈良が一緒になって独立行政法人文化財研究所となり、その後、国立博物館 3 館と統合いたしまして、平成 19 年 (2007) に独立行政法人国立文化財機構を構成することになりました。現在では、後に九州国立博物館が新しくできましたので 4 館 2 所、そ

れに、堺にあるアジア太平洋無形文化遺産研究センターとで構成される国立文化財機構の中の一施設が奈良文化財研究所という形になっています。

奈文研が創設されたときは「国立」が入っていないで奈良文化財研究所でありました。私が入所した頃は奈良国立文化財研究所と称していて、その後、独立行政法人になった段階でまた奈良文化財研究所という形にネーミングは変わっております。

そんな奈文研は、南都の様々な多様な文化遺産、先ほど申し上げたように建物や仏像、美術工芸品もあれば、古文書もいっぱいあるわけで、そういったものを総合的に調査研究する機関を目指して創立され、それに考古学的な発掘調査をするという機能も加わってできあがってきたのです。

こうした過程を踏んできているので、奈文研の調査研究には、いくつかの特徴を見ることができます。その一つが、私は総合的な学際的調査と呼んでいるものです。どういうことかという、例えば奈良の東大寺の仏像を調査するといったら、奈文研には美術工芸の専門家も当時はいましたし、建築の専門家、考古学の専門家、私のような日本史の専門家もいる。さらには、庭園史や測量の専門家、保存科学の専門家もいます。総合的な学際的調査というのは、各分野の専門家がチームを組んで、別々ではなく、一緒に調査することなのです。

そして、例えば仏像の中を懐中電灯で見たら文字が書いてあって、それに「何とか堂」というお堂の名前が書いてあるなど、文字を読むのは私ども日本史の専門家の仕事であり、建築の専門家が、「何とか堂」というのはあの山の中腹にあったお堂の跡ではないかとか、考古学の専門家が、あそこでは中世の瓦が拾える、美術史の専門家が、この仏像のこの後補こうほの部分は、中世にさかのぼって実際にはこれぐらいの時代にできているなどと知見をもちより、それぞれの専門を生かして協業で総体的に調査していくものです。

奈文研の調査研究のもう一つの特徴は、悉皆調査しつぱいです。先ほど本中所長から紹介いただいたように、私は史料調査室で、歴史研究室にも併任でありましたので、南都のお寺の所蔵史料の調査をさせていただいたわけですが、お寺の倉庫に行って1箱とり出してきて、その中に入っている文書もんじょや、文書だけでないいろいろな物も、全部悉皆で調査ちようしよを取って調査しました。このように全部調査をすると、その箱の中には、古代のものがいっぱいあるかと思ったら、古代のものはほんのちょっとしかなくて、中世のものがあって、近世や近代のものがたくさんあったりする。大学の研究室での調査では、中世史の先生についていくと近世文書きんせいもんじょを別において中世文書ちゆうせいもんじょだけを調査するということがありますが、奈文研では、とにかく全部を調査して調査に取ってラベルを貼ってお返しするというをやっておりました。

つまり、奈文研の調査は、自分は美術史だから建築だとか考古のことは知らないで済ませるのではなくて、一緒に一体として行うものであり、時代も、私は古代史だから中世以降のお寺のことは関心ないではなくて、全て現代に至るまで知らないといけないことになります。

私、古代史を大学で教えていましたが、学生に言っていたのは、古代史を学ぶというのは大変なことで、例えば、東大寺の歴史を学ぼうと思ったら、発掘調査と一緒に、近代の東大寺を理解したら、その下に近世の東大寺が見えてきて、近世の東大寺をいろいろ研究すると、その下に中世の東大寺が見えてくる。そして、その中世の東大寺を除いて考えて、初めて、古代の東大寺が見えてくるものなのです。古代の史料はとても少なくなっていますけれども、中世の史料があり、

近世の史料はもっとたくさんあって、近代のものはもっともっとたくさんあります。それらを一通り理解しないと評価ができません。例えば古代から中世にかけての平重衡の南都焼き討ちで大変なダメージを東大寺、興福寺は受けている、燃えてしまったというようなこととか、戦国時代の松永久秀の戦いでやはり同じぐらい燃えてしまったというようなことをどう理解して、どういう理由で今ある古代の文物が、



図 12 厳しい先輩たち
(左から田中琢さん、坪井清足さん、佐原眞さん)

なぜ残ってきているかということを理解しないと古代の東大寺の評価はできないし、総体的な全体の評価もできない。それを知るためには中世、近世、近代の東大寺を知らなければならないということです。学問領域だけでなく、時代も全部知らなければならないということです。

こういうことを私が申し上げるのは本当に口はばったいのですが、私が入所した頃、坪井清足所長をはじめとする大勢の先輩から、「おまえは奈良学を勉強しなくてははいけない」と口やかましくというか、かなり厳しくしつけられました(図 12)。奈良学を学ぶ上では、奈良のことは何でも知ってなくてはいけないということです。私はまだ若くて、奈良研に入所したのが 26 才ぐらいでしたが、現代の奈良の喫茶店とか居酒屋さんも研究しなくてはいけないというので、その方面について随分研究したものであります。そういう形の協業による総合的な研究を目指さなくてははいけないのです。

今はどうか分かりませんが、平城宮跡の発掘調査では、先ほど、私と同じ現場班に本中さんや松村さんがいたと申しましたが、現場班をつくるときに考古第一で木器・金属器を専門とする研究員、考古第二の土器を研究する研究員、考古第三の瓦を研究する研究員、それから私ども史料調査室の古代史を学ぶ者、それから建造物研究室の建築史を担当する者、それから庭園や測量などを行う計測修景調査室の者から 1 人ずつ集まって現場班を構成しておりました。そうすると、現場で例えば建物の柱跡などが見えてくると、建築の人に「この建物はどうなるのか?」という聞きますと、「屋根はこれだったら切妻ですよ」みたいな話になりました。出土した遺物についても考古の先輩にいろいろ聞いて教えてもらうというようなことで、学際的かつ共同的な発掘調査をやっていました。私の頃は掘立柱建物の重複具合も、こっちの柱を切っているのはどちらか、新しい掘立柱はどちらかということを判定するには、3 人の研究員が集まって判断しなくてはいけないという決まり—少なくとも、私は決まりだと思っていました—が、ありました。けれども、私が入所して間もなく、右も左も分からない頃に、私の尊敬する考古学の金子裕之さんと、岡本東三さんという先輩と私の 3 人で判断するのに、両先輩の意見が分かれて、「おまえはどちらに付くんだ」みたいな感じになって、ハラハラしたことがありました。このことは無事に片づきましたが、共同研究がシビアな意味で学問を所員の間で闘わせる場でもあったことを示すエピソードと言えるでしょう。

そのような調査研究をしてきたわけですが、今でも奈文研は平城宮跡などで、3 か月ごとに現

場班は交代しながら、一年中発掘しています。毎日の発掘というのは本当に地味なものだと私は思っております。よほど珍しいものが出土したときは新聞記事になったりしますが、そうでない場合でも、そういった地味な日々の調査・研究の積み重ねが先ほど申し上げたように古代都市の実像を明らかにしてきたのです。一見地味かもしれないけれども、そういう積み重ねが本当に大きな力になるということを訴えたいのです。

その中で、奈文研はフィールドを持つ研究所でもあり、それを生かした形で発掘調査の技術や測量実測の技術、あるいは写真撮影の技術などの開発も行い、それらを研修などで全国の担当者の方に伝えてきたのです。

さらに遺跡の整備活用についても、平城宮跡でも盛土、張り芝での整備から始まり、半立体的な整備、そして、今は立体的な整備になっていますが、そうした整備や活用についても様々な技法を編み出し、平城宮跡で実験して、それがまた各地に広がっていったのです。

また、保存処理や年輪年代学なども奈文研のしてきた仕事の中で大きな成果を上げたものです。環境考古学についても大きな成果を上げてきました。このほか、地下レーダー探査などの非破壊的な方法による遺跡の調査・探査でも日本をリードしてきたと言えます。

今述べてきたのは、遺跡の面ですが、遺物の面でも様々あり、例えば、代表的なものとして申し上げますと、私が言うちょっと口はばったいのですが、木簡学の展開なども奈文研なしでは、できなかったといえます。平城宮木簡、あるいは長屋王家木簡、二条大路木簡、藤原宮木簡などに関する奈文研の研究が、日本における木簡学をリードしてきたのです。今日、平城宮跡で出土した木簡は、国宝や重要文化財に指定されていますが、これから順次保存処理が終わってくれば、そうした指定文化財が、さらに増えていくことになります。

また、そういった木簡の情報、データを隠すことなく——木簡研究で私、最初から先輩から言われていたのは、「木簡研究で自分たちは一番初めに木簡を見られる立場にいるけれども、その立場を利用して、ほかの人より先に自分だけ論文を書いては駄目だよ」ということを随分厳しく

WEBでひらく木簡の世界 / 木簡庫 Wooden Tablet Database

English 简体中文 繁體中文 한국어 奈良文化財研究所 Naniwa National Research Institute for Cultural Properties

木簡庫とは 使い方 ヘルプ

木簡をさがす 文字画像をさがす

すべて 本文 カテゴリー (意味検索) テキストから 画像から

キーワード 検索する

項目検索 内容 国名 木簡の形 出典 年紀・人名 大きさ・形態等 遺跡

お知らせ 毎月第4水曜日 12～14時の間は定期メンテナンスのため、サービスを一時停止いたします。

2023/05/09 新しいデータをアップしました！ (5/9) NEW

2023/01/16 新しいデータをアップしました！ (1/16)

2022/10/27 11月のメンテナンス日変更のお知らせ

2022/01/12 新しいデータをアップしました！ (1/11)

2021/07/29 『木簡庫』『電子くずし字辞典データベース』連携検索サービス終了のお知らせ

2021/01/29 新しいデータをアップしました！ (1/29)

木簡庫とは 使い方 ヘルプ

登録点数：56299

図 13 木簡のデータベース「木簡庫」トップページ

言われました。もし、自分で研究するのだったら、必ず木簡概報のような形で、1 年間に出土した木簡のデータを全国、世界の研究者に公表した後で、研究しなければなりません。

情報公開につきましては、今では、木簡庫というインターネットで釈文や画像まで見られる形で情報公開がなされています（図 13）。これはアクセスする方が非常に多いわけですが、木簡の実物の写真が鮮明に見られますので、ぜひ一度、ご覧いただければと思います。

それから、奈文研の仕事の中で私が取り上げたいと思っているものとしては、やはり南都諸寺院が所蔵する文化遺産の調査研究です。文書を含めての調査研究が、その寺院の保存や整備や活用へと結びついていったのです。

古代都市平城京の解明については、先ほども申し上げたように、世界的にも胸を張ることができる古代都市の精密な調査研究成果を提供してきたと思います。さらに、国際協力に関しても、奈文研の保存科学のほか、発掘調査、あるいはその記録づくりなどで得てきたノウハウをもって、中国、韓国との共同研究や、アジア諸国や西アジア諸国の保存修復への協力を進めてきました。それに合わせて、多言語で研究成果を提供すべく、動いています。それと同時に、発掘調査成果のデジタルでの公開、報告書のアーカイブとして全国遺跡報告総覧が存在します（図 14）。これは、全国の発掘調査報告書を PDF 化し、奈文研がプラットフォームになって、だれであれ、ど

全国遺跡報告総覧
Comprehensive Database of Archaeological Site Reports in Japan


奈良文化財研究所
Naniwa National Research Institute for Cultural Properties

全文データも
検索可能!

WEBで発掘調査報告書を読める

全国遺跡報告総覧

Comprehensive Database of Archaeological Site Reports in Japan

キーワードから探す

- ② 詳細検索
- ② 遺跡(抄録)検索
- ② 全国文化財イベントナビ
- ② 詳細検索
- ② 文化財動画検索
- ② 文化財論文検索

一覧から探す

- ② 新着一覧
- ② 発行機関一覧
(都道府県別)
- ② 報告書種別一覧
- ② みんなの注目コンテンツ

遺跡報告総覧通信

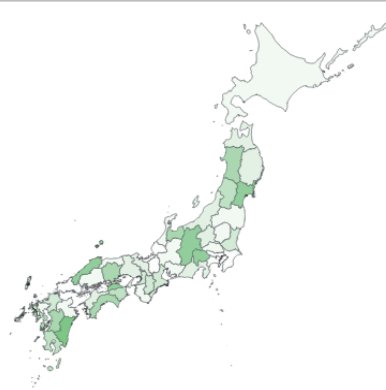
- 1/31 書誌の巻次およびシリーズ番号にて一括置換/並べ替え
- 1/30 NCIDとJP番号の一括登録
- 11/15 ツイート時に管理機関名とTwitterアカウントを表示する機能を追加
- 11/11 遺跡抄録の遺跡種別に「水中」を追加
- 10/18 全国文化財情報デジタルツインプラットフォームの構築
- 10/7 文化財総覧WebGIS: 自然災害伝承碑の詳細表示と3D地形表示の機能公開

このサイトについて

【全国遺跡報告総覧とは】

「全国遺跡報告総覧」は、埋蔵文化財の発掘調査報告書を全文電子化して、インターネット上で検索・閲覧できるようにした「報告書のインデックス」です。「総覧」は、全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクトによって構築された遺跡資料リポジトリ・システムとコンテンツを国立文化財機構 奈良文化財研究所が引き継ぎ、運用しているものです。

日本地図からさがす



English | 日本語

[→ トップページへ戻る](#)

図 14 全国遺跡報告総覧のトップページ

ここからでも、アクセスさえすれば、その報告書を読むことができるというもので、^{つねづね}常々大変ありがたく感じています。

以上、奈文研の 70 年を見てまいりました。私は途中で、奈文研の調査研究の特徴の一つは、学際的な協業による総合的な調査研究だと申しましたが、それは「奈良学」と言い直してもいいと思います。あるいは、文化財学と言ってもいいのかもしれませんが。奈文研は、それをこれまで追求してきたけれども、これからさらに追求して、その成果をさらに発信していただきたい。

「学際的」ということは、もう既に申しましたが、調査研究の対象が遺跡、建物、美術工芸品、さらには伝統文化や古文書や歴史史料と多様であるうえ、例えば、遺跡は考古学の専門家だけのもの、あるいは仏像は美術史の専門家だけのものとかではなく、みんなで一緒に調査するところに私は意味がある、それが奈良学の特徴と思っています。

文化財学としては、平城宮跡という大変良いフィールドを持ったこともあるかと思いますが、文化財の仕事というのは、フィールドや実物と^{たいじ}対峙するといひましようか、それらに問いかけてそこから返ってくるものを取り出して、それを調査して研究するということだと思います。南都の寺院も、奈文研が文化財を実物と対峙しながら、総合的、学際的に研究してきたからこそ、蔵にある歴史史料を箱ごと調査することをお許しいただいているのだと思っています。

また、フィールドということでは平城宮跡だけでなく、現在、都城発掘調査部飛鳥・藤原地区担当があるように、飛鳥・藤原地区の発掘調査や研究もこれまでずっと進めて、多くの成果を上げてきました。^{たかまつか}高松塚古墳やキトラ古墳もそれに入ります。また、その展示施設として飛鳥資料館も多くの人に^{きゆうと}見に来ていただいています（図 15）。これなどは今、奈良県が進めている飛鳥・藤原の宮都とその関連遺産群で世界文化遺産を目指すという動きに学問的な基盤を与える上で、もちろん、明日香村や橿原考古学研究所などもありますが、奈文研、そして飛鳥資料館が果たしてきた役割には、大変大きなものがあると私は思っています。

これ以外にも、文化財の枠組みがだんだん増えてきた中で、奈文研は、^{ぶんかてきけいかん}文化的景観や^{でんとうてきけんぞうぶつ}伝統的建造物群といった文化財の新しい種目も調査研究の対象にしており、その調査研究の成果が文化庁で進めている新しい文化財の指定や登録に結びついて、文化財の保存に跳ね返っているのです。

さらに、これからのこととしては、文化財の保存と活用の展開がカギになってきます。最近、公開活用にもかなり重点を置く形で^{ぶんかざいほごほう}文化財保護法の改正がなされました。このため、今後、文化観光にも配慮した形で文化財を活用していくことになることでしょう。

その際に、どう活用するかというのは、いろいろな活用方法があっても私はいいと思います。しかしながら、やはりその文化遺産の歴史的な価値、歴史文化的な価値というものが最も基本になるものです。したがって、あまり



図 15 飛鳥資料館外観 (2021 年)

薄っぺらな形で面白おかしい宣伝だけではだめで、もちろん、面白おかしくてもいいのですが、その背景にしっかりとした学術的な基礎があるということが重要です。今、コロナで海外からのお客さんは少なくなりましたが、私は、特に海外から来られる方は、非常にレベルが高くものを見られる、一番大事な、しっかりとした学術的な歴史文化の基盤があるかどうかということを見抜いてしまうと思っています。ヨーロッパなどで世界遺産の都市が身近にあるような人たちが来てどのように感じるかということも考えてしまいます。そのような面でも、奈文研が果たすべき役割がこれからあることでしょう。

それから、国際的な発信についても、奈文研は最近ずいぶん進めています、これもそうした学術的な背景を持った発信でないと、なかなか広まらない、伝わらないものです。そして、文化財・文化遺産の保存だけではなく、その整備活用についても、奈文研は、これまでも整備についてリードしてきたし、活用もいろいろ考えてきたと申しましたが、多様な形の整備活用の方法についてぜひ調査研究して発信していただきたい。

また、保存という面では、最近、文化財防災センターが国立文化財機構の中の組織として置かれました（図 16）。これは地震や津波などの災害で指定、未指定を問わず、多くの文化財が失われてしまうということが^{がんぜん}眼前で起きた経験から、防災という視点で、文化財を守っていこうという組織です。災害があったときには人命が大事であり、文化財の保存は二の次にされてしまいます。そういった中で、もちろん人命は大事だけれども、文化財についても後世に地域のアイデンティティを残していかなければならないということで、これをどうやって守っていこうかということを常日頃から考えておくことが必要だと思います。災害が来てから考えるのではダメで、災害が来る前に、もしこうなったときにはこのようにレスキューしようということを普段から考えておく必要があるのです。しかし、災害が来てしばらくたつと人は忘れてしまう、忘れてしまうと、それこそ「天災は忘れた頃にやってくる」といいますが、忘れてしまったから災害がやってくるのであって、忘れず、常に備えていれば、天災が来ても対応できることになります。忘れず、常に備えておく、その点で国立文化財機構の文化財防災センターが果たす役割というのは、非常に大きいと言えます。

そろそろ時間になってきましたので締めに入ります。調査研究については平城宮跡の発掘調査は大分進んできたけれども、これからどうしようかという話が——私が今お話ししていることは、この後で奈文研のご担当の方たちが話すことを先取りして、自分なりの意見を先に述べてしまうことになるので、その点は申し訳ございません。

ただし、発掘調査の面では、あるいは調査研究の面では、これまでの調査で出土した遺物には、水洗いもされず、保存したまま、うず高く積み上がっている状態のものもあります。その中には木簡もたくさん入っています。これは、これから順番に調査していかな



図 16 文化財防災センターのスタッフ (2021 年)

ければ、何であるか分からないわけですが、場合によって大発見もあり得ます。つまり、今後、調査研究の進行による新発見というのはいつ、どれだけのものがあるか、まだ分からない。これまでもあったわけですから、これから私はあると思っています。

そして、私は先ほど、文化財・文化遺産というのは、私たちの子々孫々^{ししそんそん}、1,000 年後の子孫にも残さなくてはいけないものだと言いましたが、そうした調査で出土した遺物を確実に残していかなければなりません。——木簡の場合、水洗いして記録をつくって、報告書もつくって、そして保存処理に回して、保存処理し終わったものから順番に重要文化財や国宝に指定されていくことになりますが、そのような仕事というのは、気が遠くなるような、例えば私が生きている間には、それはとても終わらないような、非常に長いレンジで考えていかなければならないものと言えるでしょう。

平城宮跡、平城京跡あるいは奈良がもつ多様な文化遺産の学際的で総合的な調査研究というものも、世界文化遺産になったからおしまいではなくて、さらにその価値を明らかにするという調査研究をどんどん進めていく必要があります。私は日本史学、古代史の研究者で、高等学校の教科書も編さんしています。日本史学においても調査研究が進み、教科書が毎回の改訂のたびにいろいろと新しく変わってきています。5 年前、10 年前の教科書と今の教科書は、一遍に大幅に変わることはめったにありませんが、年々刻々と変化し、結果的に大きな変化を見せています。それぐらい歴史学というものは変わるものですから、奈良の都の在り方についての研究も、これからどんどん変わっていきます。そして、常に平城宮跡や平城京跡を新たな研究の対象とし、その価値を明らかにしていくということは、奈文研をはじめ、関係する教育委員会なり研究者がこれからも続けていかななくてはなりません。

今回は平城宮跡史跡指定 100 年ですけれども、これから先 100 年のことを見通して、奈文研の所員の方々が奈文研の在り方を共同で討議したというお話を先ほど本中所長から聞きました。いろいろな仕事をするとともに、ぜひ 100 年後を^{まいしん}考えてもらいたい。そういった意味で、平城宮跡や奈良の歴史文化的な価値をさらに高めることに邁進していただきたいものです。

これで今日の私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。